

平成 28 年度（公財）兵庫丹波の森協会
魅力ある地域づくりの推進

平成 28 年度
丹波の森研究所活動報告

報 告 書

平成 29 年 3 月

（公財）兵庫丹波の森協会 丹波の森研究所

目 次

はじめに

1 平成 28 年度調査研究・活動報告

1-1 地域づくり支援事業（アドバイザー派遣）

- 1) 篠山市篠山地区……………2
- 2) 丹波市春日町多利地区……………3
- 3) 丹波市青垣町神楽地区……………4

1-2 美しい村づくり支援事業（まちづくり活動助成）

- 1) 地球育ミュージアム研究会……………4

1-3 地域づくり支援事業

- 1) 丹波地域まちづくり交流会……………7
- 2) 丹波篠山ひなまつりコーディネーター事業……………8
- 3) 企業と住民の協働による企業の森・里づくり……………11

2 調査研究（自主研究）

- 2-1 丹波地域の古民家再生・利活用についての基礎調査……………13

- 2-2 新たな丹波の森構想に向けての基礎調査……………18

- 2-3 丹波の森構想 20 周年以降の地域づくりについての調査……………21

はじめに

丹波の森研究所は、「丹波の森構想」（人・自然・文化・産業の調和した丹波地域づくり）を推進するシンクタンクや支援組織をめざして、平成 8 年（1996 年）、財団法人丹波の森協会（現、公益財団法人兵庫丹波の森協会）によって設けられました。

中瀬勲所長を中心に、地域づくりに関する諸分野に関する調査研究を行ってきましたが、平成 28 年度をもって退任され、平成 29 年度からは、関西学院大学の角野幸博先生を新所長に迎え、新たなスタートとなります。

また、平成 30 年度は「丹波の森構想 30 周年」であり、また県政 150 周年となる節目の年度となります。近年、少子高齢社会の到来とともに、将来人口予測が出され、社会情勢の大きな転換期を迎えております。そうした変化に対応すべき新たな丹波の森構想が模索されているところであります。

今後丹波の森研究所としては、こうした社会的要請に応えていくよう求められています。その意味においても、丹波の森研究所としても新たな展開を図るべきところにあります。

丹波の森研究所の主たる業務は、地域づくりにおける相談、アドバイス、情報提供、学習会などを通じた地域づくりの支援のほか、丹波の森づくりに関する調査研究、講演や報告会などを通じた啓発・普及、行政の施策・事業に関するアドバイザー協力を行うほか、「たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会」の調査企画部分を担っています。事業実施に当たっては、丹波の森研究所の登録研究員 11 名で実施しています。

■丹波の森研究所 所員（平成 29 年 3 月現在）

研究所所長	中瀬 勲（丹波の森公苑長兼務）
研究所次長	長澤 光一（丹波の森協会事務局長）
主任研究員	門上 保雄
登録研究員	山本 茂
	横山 宜致
	上岡 典子
	片平 深雪
	塩山 沙弥香
	谷垣 友里
	小橋 昭彦
	出町 慎
	門上 幸子
	豊嶋 尚子
宮川 五十雄	

1 平成 28 年度調査研究・活動報告

丹波の森研究所は、丹波地域の地域づくり（活力と魅力ある地域づくり）を自主研究・事業の中心テーマとして、各地域の支援を実施してきました。

近年、篠山市、丹波市ともに、小学校区（地区）ごとに設置されたまちづくり協議会や自治協議会などを中心とする地域づくりが進められています。丹波の森研究所は、このような動向を踏まえつつ、地域・行政と丹波の森研究所が情報を共有しながら、次の3つの側面から支援していくことを基本方針として、事業を実施しました。

- ①地域づくり支援事業（アドバイザー派遣）
- ②美しい村づくり支援事業
- ③調査研究（受託業務を含む）

1-1 地域づくりアドバイザー派遣事業

(1) 篠山市篠山地区

- 協議会名称：丹波篠山ひなまつり実行委員会
- 協議内容：実行委員会コーディネート
- 派遣期間：平成 28 年 9～平成 29 年 3 月
 - ①平成 28 年 9 月 13 日
 - ②平成 28 年 11 月 9 日
 - ③平成 29 年 3 月 17 日
- アドバイス内容等（9 月 13 日）
 - ・「イケメンを探せ」を実施予定。予めセレクトしたイケメンのお内裏様を探し当てた人にプレゼントの予定。陶々庵の菜づくりは、缶バッチになる予定。
 - ・例年同様、マップ作成予定。いきいきサロンに協力を依頼。
 - ・村雲まち協との連携を将来目標としている。今年度、平日のスタンプラリーに対応して、東雲保健センターでまち協が対応できるかを検討。
 - ・丸山地区は、従前の例年通り。着物の洗濯費用などかなりご厚意に甘えた部分があるので、着物着付け体験は見合わせたい。産業高校のお茶席も、参加者がどの程度確保できるか、昨年度も不安視していたので、これも見合わせたい。
 - ・特別企画を考えるヒントとして下の配布資料に示すA～Fの5案を助言。
 - ・B案～F案は何れも荷が重すぎるとの事で、従前通り講演会を本年の特別企画とする。
 - ・日本遺産の補助金はノボリと講演で提出予定。
 - ・特別講演として、日本玩具博物館への依頼。

20160809 ueoka

全体の「特別企画」＆「日本遺産のまち」魅力発信アイデア実現補助金（叩き案）

知る A案 講演会 OR ウォーキング
 講師案：日本玩具博物館 学芸員
 ・毛利将（しゅう）氏（「祭りから丹波を知る」等）
 形態：1)座学形式（市民センターもしくは何れかの会場の拠点）
 2)ウォーキング形式（河原町、福住、市野々等）

体験する B案 (外国人向け) 日本文化体験プログラム (植物、茶道、交流)

C案 (一般向け) 日本文化体験 ミニ旅 (伝統建築交流)
 1) 篠山城下の「和菓子」めぐりと古民家ギャラリーで愛でる「雛人形」
 (城下町：陶々庵+和菓子店)
 2) 地元主催ガイドとめぐる「雛人形」と老舗料亭の「雛屋膳」(城下町 or 日置)
 3) 丹波杜氏の白湯と里山の雛めぐり
 (城下～箕部～福住 or 市野々・風船造、松造、百萬石造?)
 4) 丹波焼菓元と人形ギャラリーめぐり
 (陶の郷、陶々庵、ジャスミンティム (東新町 人形ギャラリー&古民家カフェ) 他・・・)
 ⑤……

D案 デジタルフォトコンテスト
 ・「紡がれた『時』を感じる写真」などのテーマで募集
 (「ほっこり」「ぬくもり」「色」「カワイイ」・・・)
 ・カメラ愛好家だけではなく、一般の方も参加しやすいよう、また応募作品の保管の面から、スマートフォン等含むデジタルカメラで撮影したデータ投稿形式で募集。
 ・例：最優秀賞：○円相当の市内協賛店利用券 優秀賞：○円相当の篠山特産品

E案 雛まつり デカンショ街角ライブレコ
 昨年度、市野々のオープニングで、三役等の生演奏に合わせたデカンショ踊りが行われた。「シューベルティアーデたんぽ」のように、可能な幾つかの会場で、日時を違えて開催。

伝える まるいのGO！篠山ひな文化プロジェクト
 F案 参加型文化調査→ARによる公開→(次年度 資料集発行)



参加型文化調査
 調査とりまとめ方針を協議する研究会を、玩具博物館、久下先主、ワイズなびや学芸員、森研究所などと交流協働。各校区で雛人形や風船造りなど調査を実施。

知る・楽しむコンテンツ (ARによる 調査の一部公開)
 会場でスマートフォンをかざすと、「まるいの」と「日本遺産ロゴ」が現れ、雛人形や地域の簡単な説明案内が表示される。
 「もしもは雛のソングにカメラをかざすと、各会場の詳細な説明が現れる。

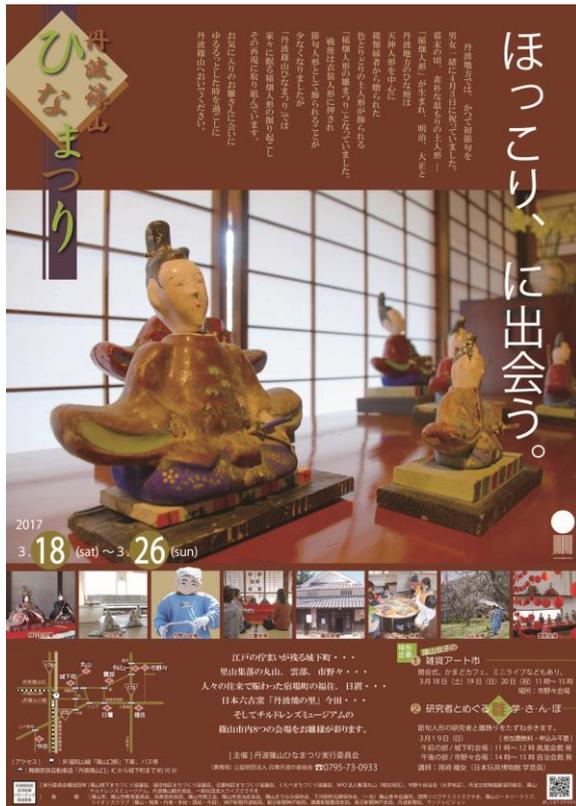
(次年度) 資料集の刊行
 「(仮題)丹波篠山の雛の特産をたどる」等の冊子としてとりまとめ、刊行する。

AR：(Augmented Reality)＝拡張現実
 現実の風景にコンピュータ上の情報を重ね合わせ、拡張して表示する技術。たとえばスマートフォンのカメラ越しに撮った、建物の名称を表示したり、過去に存在した建物を再現表示するといった、目の前にある現実以上の情報を提示する利用方法がある。
 費用：各校区の調査費+玩具博物館、ワイズなび、森研究所等の調査協力費
 データ作成費+AR設定費(協賛店等の費用支払いで追加可能)+雛人形撮影費

●アドバイス内容等（11 月 9 日）

- ・ 願い札：京都造形芸術大学の髙梨教授より「水解紙」の無料提供を頂けるとの事で、従前に日置、丸山、市野々などの川が近くにある会場で、「流し雛」のようなプログラムを行ってはどういう話が出ていた事から、再度、各会場のプログラムとしての実施検討を提案した。
 これは、恋愛など願いや、体や習慣など直したいところ、水に流してしまいたい事などを、水に溶ける紙に書き、人形や舟の形に織り、川に流して願うというもの。但し、水性ペンの使用や回収柵の設置など環境への配慮が必要との点も付け加えた。
- ・ 篠山女子の 雑貨あーと市：ポスター案では、特別企画として1. おーぷにんぐ、2. 雛学さんぽの2点を記載している。この1「おーぷにんぐ」について、「おーぷにんぐ」を前面に出すよりも、「篠山女子の 雑貨アート市」を前面に出し、実行委員会全体のプログラムとしてはどうかと提案した。これにより、ひなまつりが女性の文化を照らし出す機会や、篠山女子の作り手たちはじめとした市民の文化交流の機会となるとともに、経済効果も期待できるのではないかとその意義を説明した。これに対し、1 風呂

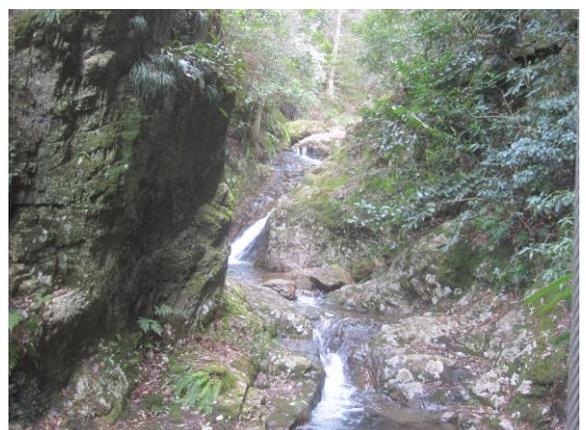
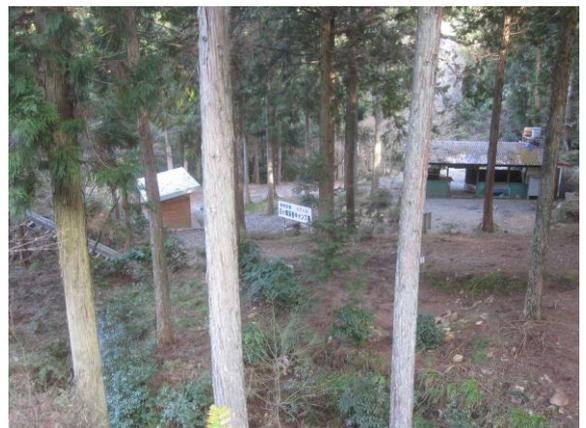
敷などの和布での髪飾りやビーズの小物などを手づくり品の出品や、手もみやネイルなどの女子が体験したいものが篠山にある事、2. 従前より手づくり市として雑貨販売している市野々会場としては、広く村雲などの協力を得て開催しており、広く市内の出店を受け入れる事は構わないとの事、3. 運営は、ウィズささやまさんも関わっている「市民プラザ」に相談してはどうかという事になり、全体企画として「雑貨アート市」に取り組む事への合意を得た。



- アドバイス内容等（3月17日）
- ・ポスター関連：ウィズささやまさんで担当されている市観光サイトに飛ぶQRコードとする。
- ・日本遺産のマーク使用申請および市からデータ頂戴次第にポスターを修正する。
- ・QRコードは、市の許可が下り次第、修正する。
- ・記念品は例年通りクリアファイルとする。絵柄はポスター同様、稲畑人形とする。
- ・JRの広報誌に掲載依頼を進める
- ・全国ひなまつりガイドに掲載を依頼する
- ・ポスターおよび総合パンフのデータが完了次第各無料サイトへ掲載を依頼する
- ・プログラム、マップの英語パンフを作成する。
- ・丸山と市野々の2会場で、流し雛を体験プログラムとして実施する。（上岡研究員）

(2) 丹波市春日町多利地区

- 協議会名称：里山ふれあいの森づくり委員会
- 協議内容：多利区営キャンプ場の活性化
- 派遣期間：平成 29 年 2 月 8～10 日
 - ①平成 29 年 2 月 8 日
 - ②平成 29 年 2 月 10 日
- アドバイス内容等（2月8日）
- ・多利区営キャンプ場現況調査
- ・溪流の景観や植物環境（苔など）は思いのほか美しく、自然資源としての評価が高かった。

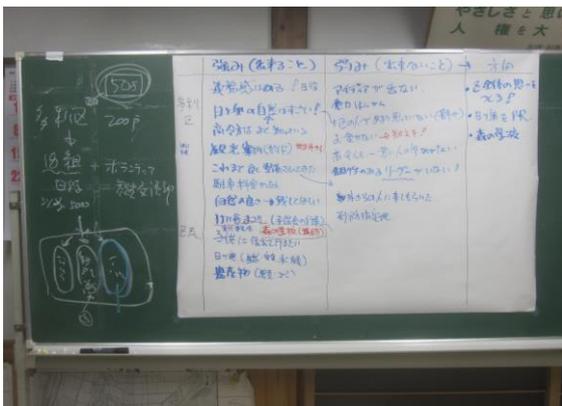


- アドバイス内容等（2月10日）
- ・多利区営の日ヶ奥キャンプ場の活性化について話し合った。
- ・出席者の全員に「強み・弱み／出来ること・出

来ないこと」をテーマに意見を募った。

- その上で今後の方向性として、日ヶ奥溪谷・キャンプ場についてはその自然度の高さを守る上でも、まず地元住民によく知ってもらうこと、年に一度は子供達やその親世代が積極的に参加（楽しめる）方策を考える。溪谷の自然観察や自然を活用したクラフト、バーベキューなど住民参加型のイベントを検討する。
- 溪谷遊歩道も一部で劣化・損傷部も見られ修繕が必要。
- 施設を整備すれば、その維持管理、コストが必要となる。つまりリスクを負うと言う意味にもなる。
- 今日の話し合いを踏まえ、委員会で再度検討し地域で方向性を出すことが望まれる。

（門上主任研究員）



(3) 丹波市青垣町神楽地区

- 協議会名称：神楽自治振興会
- 協議内容：小学校の閉校に伴う跡地活用
- 派遣期間：平成 29 年 2 月 26 日
- アドバイス内容等（2 月 8 日）
 - 篠山市での廃校活用を紹介。
 - 住民自身が提案に責任を持つべき。
 - ビジネスチャンスでもある。

（横山研究員）

1-2 美しい村づくり活動支援事業

（平成 28 年度 地球育ミュージアム研究会）

● 趣旨

- 丹後、但馬、丹波の、三たん地方の環境拠点が連携し、相互啓発を図るとともに、環境保全、環境学習、環境ツーリズム振興等、環境を活かした発展と三たん地方の絆をはぐくむ事を目的に、そのあり方を探求し実践する。

● めざす成果

- ① 基本サービスを磨く
- ② 環境学習の質の向上
- ③ 環境ツーリズムの振興
- ④ 地域の資源保全マネジメント

● これまでの経過

【H26 年度—関係づくりのステージ】

- 第 1 回（H26 年 8 月 5 日）見学/研究会立ち上げ、方向性協議（於：琴引浜鳴き砂文化館）
- 第 2 回（H26 年 10 月 21 日）見学/管理運営評価および会則について協議（丹波の森公苑、並木道中央公園）
- 第 3 回（H26 年 12 月 9 日）見学/巡回パネル展および会則について協議（山陰海岸ジオパーク館）
- 第 4 回（H27 年 3 月 10 日）見学/手簿プログラム体験/会則施行（丹後海と星の見える丘公園）

【H27 年度—議論を深め、研究会の社会認知をはかるキックオフのステージ】

- 「巡回パネル展」の実施
森公苑(H27 年 2 月)→琴引浜鳴き砂文化館→海星公園→コウノトリ文化館→ジオパーク館(H27 年 7 月)
- 第 5 回（H27 年 5 月 19 日）見学/田んぼの学校プログラム体験/環境学習について協議（於：コウノトリ文化館）
- 役員協議（6 月 15 日）研究会の 2 年目の進め方について協議（於：丹波並木道中央公園）
- 第 6 回（H27 年 7 月 7 日）インバウンド活動紹介、研究会のあり方、環境学習について協議（琴引浜鳴き砂文化館）
- 「トークセッション」の開催（H27 年 10 月 25 日, パネルブース展同時開催）
- 第 8 回(予定 H28 年 2 月 16 日) 環境学習について（話題提供 しまなみアースランド）、次年度連携活動について協議（於:丹波並木道中央公園）

●平成 28 年度のあゆみ

- H28.5.30 第 1 回 仮称) ヤング三たん (於：丹後 海と星の見える丘公園) 共同企画案としてクラフト&スタンプラリーへのトライを合意
- うみほし公園の園内見学ほか、各館 30 分程度の紹介および互いを知るワークショップを実施。
- スタッフによる共同企画案を協議し、夏休みの特別企画として、各館の体験プログラムとなっているクラフトを生かし、クラフト&スタンプラリーへのトライを合意。



- H28.7.6 第 2 回ヤング三たん (於：コウノトリ文化館)
- クラフト&スタンプラリーの詳細決定、クラフトボックスの試作品づくり
- 参加者：鳴き砂 (松尾)、海星 (野木)、コウノトリ (北垣)、森研 (上岡、塩山)
- クラフト&スタンプラリーのプロジェクト名、チラシ&スタンプ台、思いで BOX の試作等を実施。



- H28.7.23 (土) ~10.30 (日) 第 1 期『但馬×丹後×丹波 3TAN おもいでボックス&スタンプラリー』を実施。
- 継続して第 2 期を実施中。



●今後について

- 「3TAN おもいで BOX&スタンプラリー」は、スタンプ台紙が残っていることから、来年の夏、8月31日までを目安として、継続実施する。
- 本企画の集計においては、今後、共通のフォーマットで記載し、巡回のルート等を把握する。
- 大人の三たんは宇治見学等今後の検討とする。
- 琴引浜・ネイチャークラブハウス見学
- 鳴き砂で新しいクラフトメニューとして予定される、「UV レンジでつくる 微小貝入りペンダント」を体験。

(上岡研究員)

- 「高速道路利用観光地域連携推進プラン」応募プレゼン資料



2. 三たん地方とは・・・ (2/3)

② 自然との共生の物語つむぐ「三たん」

三たん地方の環境と自然の共生の物語つむぐ「三たん」

日本海側で最も都市間連絡速度の速い高規格幹線道路の「空白地帯」

環状道路＝「三たんリンク」の構築を控え、三たんは交流圏形成の時を迎える。

日本海側で最も都市間連絡速度の速い高規格幹線道路の「空白地帯」

環状道路＝「三たんリンク」の構築を控え、三たんは交流圏形成の時を迎える。

4

2. 三たん地方とは・・・ (3/3)

③ ミッシングリンクの解消へ 交流圏形成への時を迎える「三たん」

日本海側で最も都市間連絡速度の速い高規格幹線道路の「空白地帯」

環状道路＝「三たんリンク」の構築を控え、三たんは交流圏形成の時を迎える。

4

3. これまでの取り組み

研究会の目的

三たん地方は、山陰海岸ジオパークや丹波電発掘など、地球のあゆみを辿り、これからの地球環境を考える最前線の現場です。本パートナーシップは、その役割を果たすべく、三たん地方の環境ミュージアムが連携し、相互啓発とともに「環境ツーリズムの振興」「学びの質の向上」「地域資源マネジメント」による「環境を活かした発展」と「三たん地方の絆を呼び戻す事」をめざします。

二年半のあゆみ

関係づくりのステージ (H26年度)

- 研究会の立ち上げ (H26.8)
- 会則設置 (H27.3)
- 巡回パネル展 アンケート調査実施 (H27.2～8)

キックオフのステージ (H27年度)

- トークセッションの実施 (H27.10)
- 第4回地域の環境学習のあり方などをテーマに議論
- 施設巡回視察、各プログラムの再点検

具体活動展開のステージ (H28年度)

- 若手スタッフによる「ヤング三たん」部会の立ち上げ (H28.5月)
- スタンラリー&クラフトBOXの実施 (H28.7月～)

5

4. 支援による取り組み

「環境ツーリズムを進めるためには」「地域資源のマネジメント」と「学びの質の向上」が基盤となります。本支援により次の7つに取り組みたい。

■ 環境ツーリズムの振興

- ① 三たん情報発信ツール整備
- ② 「ママ薬おでかけ応援店」制度づくり
- ③ 周遊型モデルプログラムの提案
- ④ ワンストップ型WEBサイトの構築

■ 地域資源のマネジメント

- ⑤ サテライト・モデルの形成
- ⑥ 地域資源サポーター育成システムの構築

■ 学びの質の向上

- ⑦ ステータスアップ制度の構築

ミュージアムの観光ネットワーク基盤(発信ツールや周遊モデルなど)とともに、(各々の)地域を巻き込んだ面的な基盤づくりを進めたい。

6

資源マネジメント-市民活動の観光商品化&活動持続

⑤ サテライト・モデルの形成 (1/2)

課題

- 環境ツーリズムの振興は、地域環境の持続向上が前提。
- 三たん地方は、市民による様々な環境保全活動が活発に行われる。一方で、5～6年で活動が沈滞する場合も往々にして見られる。

狙い

市民活動地を、現在進行形の環境展示場「サテライト・ミュージアム」と位置づける事により、下記3つを狙いとします。

- 1) 市民活動が活気づき継続するよう、見学ガイドなど市民活動地の「観光コンテンツ化」を図る。
- 2) 拠点ミュージアムとサテライトとの連携を図り環境技術や運営・サービスのノウハウ、情報発信の場の共有を図る。
- 3) 拠点だけではなく、市民活動地も含めた面的な環境ツーリズムエリアを形成する。

11

資源マネジメント

⑤ サテライト・モデルの形成 (2/2)

内容

- 1) 「サテライト・ミュージアム」のモデル地区を三たん各地域1箇所程度を選定。各サテライトでは、復元の見学ガイドや自然体験、アウトドアスポーツなどの体験プログラムを試験実施。
- 2) SAや道の駅を「出前ミュージアム」と位置づけ得意とするアウトドアフィールド(SAの緑地帯等)を活用しクラブ体験や自然観察などワークショップを展開する。これにより道路サービス施設を「環境学習の場」とする新たな機能を付加する。

目標指標

- 1) 地域の活動参加者数、活動頻度、連携団体数
- 2) SA等の利用者数

12

資源マネジメント-ゲストから資源ホストへの仕組みづくり

⑥ 地域資源サポーター育成システムの構築

課題

- 地方のツーリズムには、飲食物販等の直接的な経済効果に加え、森や農、川など地域資源保全への外部努力導入という側面も期待される。
- しかし豊林漁業の繁忙期サポーターやボランティア制度は、実際にはサポーターの技術力が課題になり、交流という意味合いに留まる場合が多い。

狙い

各ミュージアムが行うプログラムを纏り、行政等が設置するボランティア制度等と関連づけ、その習熟認証の場とする「地域資源サポーター育成システム」を構築。これにより、ミュージアムによる

- 1) 地域資源の受け手の発掘
- 2) サポーターの技術向上 ひいては
- 3) 移住者増 をめざす

内容

各ミュージアムのプログラム間の関連づけやプログラムの見直しを行い、リンクのあり方を、関連機関と協議調整を行い制度設計を行う。制度内容についてチラシやWEBで周知を図る。

目標指標

サポーター、ボランティア数

13

5. おわりに

環境ミュージアムからはじめる地方連携

14

1-3 地域づくり支援事業

(1) 丹波地域まちづくり交流会

●テーマ：たんば交流新聞を作ろう！

- 地域情報を発信する基本的なツールに関する考え方をもとに、地域を超えて具体的な紙面づくりを通して地域間の交流を図る。

●日時等

- 日時：平成 28 年 12 月 3 日（土）
13：30～17：00

- 場所：柏原住民センター 2 階会議室

●講評

- 高嶋正晴立命館大学産業社会学部教授

●協力

- 丹波地域の若手デザイナーおよびファシリテーター（計 14 名）

●内容

- 第 1 部 たんば大編集会議

小グループに分かれ、各地域から持ち寄っていただいたネタを共有。それを元に、グループで新聞としての構成を考え、見出しや記事を執筆。デザイナーがそれを新聞の形態にまとめた。

- 第 2 部 育成講座を受講しての実践報告

柏原自治協議会（丹波市）からは IT を活用した勉強会と、企業と連携して行った情報発信実験、アイデアソンの様子を、八上まちづくり協議会（篠山市）からは養成講座で知った地図関係のサービスを利用したスタンプラリーの実施状況について報告があった。

- 第 3 部 完成！ たんば交流新聞

完成した新聞をみなさんにご披露し、高嶋教授より講評をいただいた。

●交流新聞づくり講評（高嶋教授）

- ワークショップで作っていただいた「丹波交流新聞」いずれも力作のポスターが出来上がりました。「丹波ナイト未来新聞」のように、テーマの定まった見出しが印象的なものもありますね。デザイナーさんやファシリテーターの人たちと一緒にやってみてどうでしたでしょうか。一緒に新聞づくりをすることで、考え方や進め方など、普段と違っているところがあって色々参考になったのではないのでしょうか。

- 今回の新聞づくりワークショップでは、単にこうして新聞を作って終わりではありません。気づきというか、大事な点が幾つかあります。まず、県内他地域と一緒に新聞を作るなかで、他

地域の取り組みの詳細、交流の進め方、仕組みなどを知ることで、また、自分たちの取り組みや地域の魅力を改めて見直すことにもなり、これまでの取り組みをより良くしたり、新しい発想での交流を行っていくよい刺激が得られたのではないかと思います。他の地域がどんな取り組みをどのように行っているか、そしてその取り組みを地域の課題解決にどう繋げていっているか、ぜひ気づきを地域に持ち帰って今後の取り組みに活かしてほしいと思います。

- ポスターにのっている、丹波地域で取り組まれている各交流プログラムは、どれも興味深いものばかりです。これらはおおまかには、農産物や特産品などの「ものづくり」を手がかりにした交流、地域のお祭りなどの「ことづくり」を手がかりにした交流に分けられます。こうした交流をより有意義なものにしていくには、何のために交流を進めていくのかという点をいま一度振り返ってみてほしいと思います。つまり、「ものづくり」交流は、「この地域にはこんなええもんあるで」というだけでなく、生産者と消費者（訪問者）とが出会う絶好の機会に。他方、「ことづくり」交流は、地域の担い手と訪問者との出会いです。単なる訪問者から「こと」を支えてくれる当事者へと変わってもらえるような工夫があればと思います。また、「ものづくり」と「ことづくり」を組み合わせたプログラムもいいでしょう。いずれにしても、単なる交流に終わらせずに、さらにその先を考えたより良い交流プログラムづくりが大事になります。各グループのポスターからそのための手がかりをぜひ見つけてほしいと思います。

- 県民局にはぜひこのようなユニークで有意義な機会をこれからも引き続き設けていただき、さらなる交流活発化に向けていっそうのサポートをお願いしたいと思います。

●参加者 19 名

- 丹波市：久下地区、上久下地区、生郷地区、成松地区、柏原地区、春日部地区、新井地区
- 篠山市：今田地区、福住地区、大山地区、味間地区、草山地区

●結果概要

- 実際に新聞という形になるところに、ダイナミックな情報交換ができたものと考えて。ただし、今回は時間が少ない中での実践だったため、デザイナーにかなりの負荷がかかった。

■丹波地域まちづくり交流会（12月3日）



(2) 丹波篠山ひなまつりコーディネート事業

●丹波篠山ひなまつりの特性

【団らん交流】

- 他の多くの雛めぐりイベントでは、商店の窓辺あるいは一般家屋の玄関脇の小間に飾られた雛人形を立ち止まって眺めるタイプのものが殆どである。丹波篠山では、家屋に上がらせて貰い、畳に座して庭などとともに雛人形を鑑賞したり、地元の人と話をしたりできる箇所が多く（福住一さんば屋ひぐち・わだ家、日置一中立舎・ささらい、市野々一自治会館、丸山一公民館、城下町一陶々庵、鳳凰会館 8箇所）、女子の成長を親族や近隣とともに祝う古来の姿に近く、足を延ばして味わう価値のある時間を生みだしている。今後も、こうした訪問客と地元の人、あるいは訪問客同士が、雛人形や庭を鑑賞しながらゆったりとした時を持てるという座談の魅力を持ち続けて頂きたい。

【前例のない里山集落の雛めぐり】

- 他の雛めぐりは、限られたエリアの「城下町」「宿場町」あるいは「商店街」などにおける開催である。丹波篠山では、城下町や街道村だけでなく、丸山や市野々などの「里山集落」と今田の「陶芸の里」など、市域全体に開催地が及び、開催地のタイプが多様性に富んでいる。
- なかでも市野々や丸山などのような「里山集落」における雛まつりは、他の雛めぐりに例がない。丹波篠山の雛まつりの大きな個性となるものであり、特に都市部や外国からの来訪者にとって、里の美しさを座してゆったりと味わえる事は大きな魅力であると思われる。
- さらに市野々における、田んぼや里山などを含め集落全体を会場とした展開は、雛めぐりとして新しいモデルを示されたと言える。

【高い文化性】

- 拠点会場での千体雛など人形の数で魅せる、商店街のショーウィンドに高度成長期の既製品の雛人形が並ぶ、といった量の特徴とした文化性の乏しいものも多い。丹波篠山では、豪商などに見られる極めて豪華な雛人形はないものの、今回クローズアップされた稲畑人形はじめ、江戸から明治、大正、戦前頃までの、品格のある古典雛が、城下町だけでなく、丸山、市野々など縁辺地域にも数多く保存されていた。さらに稲畑人形展や作家の講演会、今田の陶雛展示、福住の手芸作品展示、丸山の雛人形コレクショ

ン展示などが行われたことにより、丹波篠山の雛めぐりは、文化性の高いものとされていた。

- 6つのキーワードからみた状況
- 6つのキーワード「文化」「女子」「美—まちなみ力」「繋がる—絆力」「食—一味力」「体感—おもてなし力」を開催前に提案させて頂いた。これらの視点から、今回のひなまつり状況を捉えてみた。
- 文化(文化力) —篠山の育む文化を呼び覚まし、奥深さを魅せる
- 多くの雛めぐりは「千体雛や巨大雛で目を惹くショーウィンドーに並ぶ雛人形の出展数を競う」といった、“規模”を目玉に集客を図るものも多くみられる。これに対し、地域で豪商の古典雛が開帳される雛まつり(京丹後市久美浜)や、手づくり作品が展示される雛まつり(室津、亀山等)、まち並み建築の特徴を活かした展示が行われる雛まつり(日野町のさじき窓)などは、普段は目にすることがない、まちの深みを見せる機会となっている。
- 文化面での課題
- 「物語」を伝える、ちょっとした説明サインを制作年代や〇〇家所蔵など、人形や展示物の物語を伝える説明サインが、城下や市野々、福住、日置などで置かれていた。
- 案内人がおられる事であり、全てに説明サインが必要というものではないが、地域の人々の温もりを伝えるものとして、会話のきっかけとして、また地域自身で歴史や文化を見つめ直す機会として、他会場でもこのような説明サインを活用して頂きたい。
- 文化面での今後の展開として
- 毎年、文化テーマを持つ雛まつりが、年中行事であると同時に、地域の文化を表出する機会—“篠山の文化祭”として位置取りできるようになればと考える。このため「稲畑人形」だけではなく、「雛掛軸・屏風」「古典雛」「手づくり雛と雛飾り」(作家や工房物、折り紙雛など市民の手づくり雛や、つるし雛などの雛かざり)あるいは「木と土の雛」「カワイイ」「和小物」「雛天神」などの注目点を毎年設定し、拠点会場の企画やクイズラリーなどの巡る仕掛けづくりなどを展開することが考えられる。
- 篠山の個性として、「里山の雛まつり」のイメージをより印象づける
- 篠山在住作家ではないが、里の風景や人の温も

りを人形で表現している「高橋まゆみ」や「渡辺うめ」などの女性人形作家展を全体の企画展とすることができれば、里山集落の雛まつりという、他にない篠山の雛祭りのイメージをより明確に印象づける事ができるのではないかと考える。

- 繋がる(絆力)—地域間の絆を深める
- 雛まつりは、各地域がテーブルを囲み知恵を寄せ合い、地域間の絆を深める良い場となったと感じる。
- 城下以外の周辺会場に多くの来訪者がみられ、丸山等から提案された「スタンプラリー」は、7つの会場を巡って貰う事に大きな効果を果たしたと見られる。
- 地域間の絆での課題
- 互いに案内の周知・会議で共通認識となっていた、城下から日置へ、あるいは雲部から市野々へなど、互いに案内しあおうという点は、日置・中立舎において福住や雲部への案内が行われているのを見かけたが、大阪教育大の碓田先生からは、他会場への案内がもっとあっても良かったという感想があった。
- 次年度は、こうした相互案内の意識を、役員だけではなく、住民一人一人に、今一度、周知を図っていく事が大切と感じる。
- 事務局への負担は相当であったと思われ、無理なく継続していくためには、各会場と有志の協力が必要と思われる。
- 今後の展開として
- 巡らせる仕掛けとして、スタンプラリーのほか篠山全体もしくは会場を広く展開している城下町や市野々で、歴史4館で行われたようなクイズラリー—「〇〇で見られるお軸の数は?」「案山子の博士さんを探せ」などの仕掛けも考えられる。
- また分散型の雛めぐりに対応するため、写真入りの案内マップパネルなどを作成し、各拠点会場においても案内しやすいかもしれない。
- 城下町会場だけでも広く見るポイントが掴みにくい感じがあるので、昼食とセットにした半日ウォーキングツアーなどがあっても良いかと思う。
- 美(まちなみ力) —まち並みの美しさを際立たせる
- 福住、市野々、城下、日置の4つの会場では、展示会場内だけではなく、まち並み全体を会場

と捉えた演出が行われていた。

- 福住では、つるし雛やもち花による軒下や玄関先の「街道村のまち並み飾り」は、黒竹を使うなどまち並みに合った細やかな心遣いがあり、短期間に数多くの飾り物がつくられた事に驚かされた。
- 市野々では、田んぼや里山、民家の縁側など集落全体を会場とした展開が図られ、案山子による誘導とともに場の物語づくりや、竹を使った花飾りなども素晴らしかった。多くの案山子祭りでは、沿道に一列に並んでいる場合が多い。ここでは、例えば橋の欄干から川面を覗く案山子、バス停に集う案山子など、風景に物語を与え、人々を楽しませていた。
- 城下では、木製のサインプレートや絵手紙は、人の温かみを感じるまち並み飾りとして好評を博していた。
- 日置では、着物のぼり旗と丹波篠山ひなまつりと記したタレなど、展示会場周辺が美しく彩られていた。
- こうしたまち並みを魅せるという観点からは、できれば集落が見渡せる高台に立地する丸山公民館で、ベンチ周辺を、水仙等の花で彩ったり、集落の案内サインを設置したりなど、眺望ポイントとして活かして頂けたらと感じる。
- 体感（おもてなし力）— ‘見るだけ’ から、体感と収益性のある取り組みへ
- 体感プログラムとして下記のものが行われた。
 - 今田：陶雛の上絵付け体験
 - 城下会場西町の陶々庵；折り紙葉づくり
 - 城下まち会館：お茶席
- 収益につながる飲食・物販等としては、下記が行われていた。
 - 河原町鳳凰会館：甘酒、ひな団子販売
 - 市野々：ぜんざい、カレー他、木のおもちゃの販売
 - 「体験プログラム」の種類は多くはないが、先に記載したように、福住、日置、市野々、丸山や城下の陶々庵など、伝統的な家屋の中に入れて頂き、座談の交流の場がしつらえられている事が、体感面としても優れた点だと考えるので、こうした方向を今後も持ち続けて頂きたい。
 - 今田の絵付け体験は、手間がかかり

人数的に多く確保できない面もあると思うが、体験プログラムとして大変良いものであると感じた。福住の顔出しや市野々の石ころアートプレゼントなど、ちょっとした遊び心が来訪客を楽しませていた。城下まち会館でのお茶席は、山野草展に埋もれて解りにくかった事と、できれば和室のある場所で行えれば雰囲気のあるものになったのではないかと感じる。

- 「食」に関しては、どこで何を食べられるのか、情報が得にくいのが課題と感じる。
- 「パンフレットに食事処マップ等を差し込みで入れる」あるいは「食事処、みやげ処をマップに番号ではなくマークで入れ明瞭にする」「他のパンフレットに比べ枠が大きい協賛の頁に、おすすめメニューを写真入りで入れる、営業時間を明記するようにする」事も可能かと感じる。さらに、できれば協賛各飲食店がお雛様特別メニューを提供するように呼び掛けていければと感じる。
- 市野々や福住、城下などでは、主催者側が楽しんで行われているのが伝わり、訪れた側も一層楽しい気分させていた。「おもてなし」とは、訪問客をせつたいする事ではなく、その地の恵みに感謝して、訪れた人と地域の人とが共に楽しむ事だという事を改めて認識させられた。
- 情報発信
 - 新聞各社への情報提供ほか、フェイスブックへの掲載など、各会場が情報発信につとめた事が今回の集客につながったと思われる。今後の情報発信への取り組みとして、下記等を検討していきたい。
 - 各会場の企画決定時期を早め、篠山 ABC マラソンに間に合わせるなどにより、雛祭りの前のイベントでパンフレットを配布する。



(3) 企業と住民の協働による企業の森・里づくり

●目的

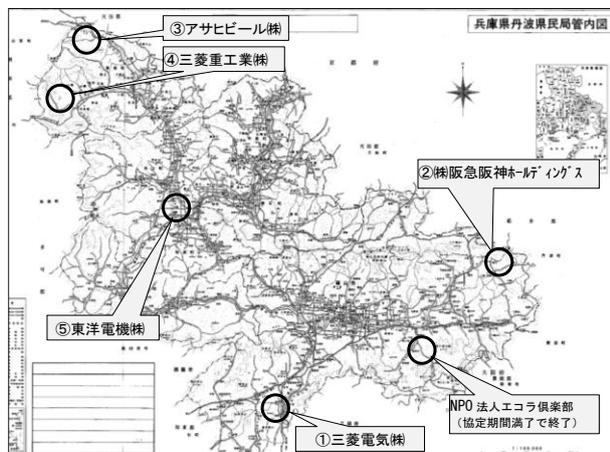
・本事業は、平成 19 年度から平成 25 年度にかけて丹波県民局が実施してきた「企業と住民の協働による企業の森づくり事業」の後を受け、活動が継続される 6 地区の森づくり協議会の活動を支援することを目的としている。

・なお、篠山市の「曾地中里の山づくり協議会」（地元：篠山市曾地中地区、企業・団体：特定非営利活動法人エコラ倶楽部）での森づくり協定期間（平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月）の終了を受け、本事業での支援対象地区は 5 地区となった。

●サポート対象地区

・平成 28 年度 企業と住民の協働による「企業の森・里づくり」事業におけるサポート対象地区は、下記の森づくり協議会である。

- ①油井鎮守の森を守る会
（地元：篠山市油井地区、企業・団体：三菱電機株式会社神戸製作所）
- ②篠山宮代の里森林保全協議会
（地元：篠山市宮代地区、企業・団体：(株)阪急阪神交通社ホールディングス）
- ③遠阪アサヒの森づくり協議会
（地元：丹波市青垣町遠阪地区、企業・団体：アサヒビール(株)西宮工場）
- ④神船・大名草の森づくり協議会
（地元：丹波市青垣町大名草地区、企業・団体：三菱重工業(株)神戸造船所）
- ⑤甲賀の里森づくり協議会
（地元：丹波市氷上町成松連合区、企業・団体：東洋電機株式会社）



●サポート日程

- ・平成 28 年 4 月 6 日
遠阪森づくり協議会（打合せ）

・平成 28 年 4 月 9 日

油井鎮守の森づくり協議会（活動日）



・平成 28 年 5 月 14 日

遠阪アサヒの森づくり（活動日）



- 平成 28 年 5 月 27 日
甲賀の里森づくり協議会（打合せ）

- 平成 28 年 5 月 28 日
油井鎮守の森づくり協議会（活動日）



- 平成 28 年 11 月 19 日
油井鎮守の森づくり協議会（活動日）

- 平成 28 年 12 月 17 日
油井鎮守の森づくり協議会（活動日）

- 平成 28 年 8 月 31 日
神船・大名草森づくり協議会（打合せ）

- 平成 28 年 11 月 3 日
神船・大名草森づくり協議会（活動日）



- 平成 29 年 3 月 7 日
甲賀の里森づくり協議会（活動日）



2 調査研究

2-1 自主研究助成「丹波地域の古民家再生・利活用についての基礎調査」

●研究の背景と目的

- 平成 25 年住宅・土地統計調査結果によると全国の空き家総数は約 820 万戸にも及び、同調査結果によると丹波市の空き家戸数は約 4290 戸（16.1%）、篠山市は約 2960 戸（16.5%）。この数字は、空き家を「課題」として捉えるか、「資源」として捉えるのかによって大きく姿を変える。空き家バンクの設置などで空き家を移住定住促進の手段として活用する動きは活発化している。一方、空き家を抱える地域側の視点に立てば、増え続ける空き家を、「地域での暮らしを楽しく元気にするための資源」として活用しようという動きはまだまだ少なく、地域で活用するノウハウが不足している。
- 本研究では、空き家を「地域での暮らしを楽しく元気にするための資源」として活用するための知見を得ることを目的に、全国で取り組まれている先進事例の視察調査を行う。そして、地域が主体となって自分たちが暮らす地域を楽しく元気にするために空き家を活用していく機運の醸成につなげることを目的とする。

●事例 1：空き家活用サークル「佐治倶楽部」の取り組み/兵庫県丹波市青垣町

【活動の立ち上げ】

- 2006年9月 日本建築学会近畿支部120周年記念事業「美しいまちをつくる・むらをつくる」設計競技が実施。兵庫県丹波市青垣町佐治の宿場町を敷地にまちづくりの「シナリオ」を提案する設計提案競技の開催。関西大学建築学科建築環境デザイン研究室の提案が「丹波市長賞」を受賞。その提案を具体化していくことに。
- 2007年7月 関西大学が空き家を借りて「関西大学佐治スタジオ」を開設。毎週末、空き家リノベーションなどの活動を実施し、多くの学生が関わり続ける定住を実践。
- 2009年度 住民主体による空き家活用の仕組みの検討開始(国交省「住まい・まちづくり担い手事業採択)
- 2010年度 佐治倶楽部立ち上げに向けた社会実験の開始。
- 2011年1月 佐治倶楽部設立(当初は20名)

【空き家の再生手法】

- 空き家リノベーションプログラム

- 関西大学の学生と協働し、地元の工務店や建築の専門家の支援を受けながら、自力改修で行う。空き家の改修現場を周囲に対してオープンにする。だれでもいつでも現場見学可能
活用方法を地元の方々と検討するワークショップも改修前から改修後にかけて実施
若い大学生が地域に関わり、地元の方々と交流を深めることを大切にしている
- アイデア貯金
空き家を活用してまちや暮らしを楽しくするアイデアを貯金するワークショップを随時開催
- 改修資金
小さな改修事業(10万円規模)⇒佐治倶楽部の自主財源(会員の年会費、空き家の利用料などの収益事業)
大規模な改修⇒国や市兵庫県、丹波市の補助制度を活用して実施
- 【空き家の流通・確保】
- 関西大学佐治スタジオは、当時の市役所担当者が青垣町出身者で、その方が地域内で空き家に関する情報を集め、空き家リストを作成。7件ぐらいの候補の中から、立地、建物の規模、建物の程度、条件、家主さんとの関係など様々な条件を比較して選定した。
- 歩き回って、良さそうな物件があったら家主や近所の知り合いに相談する
- 空き家所有者から空き家活用の相談が来る
- 2016年度より丹波市空き家バンク「住まいるバンク」スタート。空き家の情報収集。
- 2016年度より「TAMBA 地域づくり大学」という事業で、空き家まちづくり学を担当⇒空き家を地域で活用する担い手作り
- 【空き家を生かしてまちを面白くする仕組み】
- 若い大学生が丹波に故郷のように関わり続ける拠点として空き家を活用。関西大学の大学生が滞在型の講座やゼミ合宿などを開催する
- 「ないものは自分たちで作る」空き家を使ったチャレンジショップの実施。佐治倶楽部の会員が、カフェ(週3日や月2回、毎週月曜など)や月末BAR、花屋さん、茶道教室、パン屋さんなど
- 地元の高校生たちがまちに関わる仕組みとして空き家を活用する。県立氷上西高校のまちづくり部の生徒たちと空き家センバヤの活用に取り組む。
- プロセスオープン型空き家リノベーション
空き家の改修作業自体が、まちを元気に楽しくするようなきっかけにする。

事例 02 尾道空き家再生プロジェクト/尾道市

ヒアリング：豊田雅子（NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト代表/主婦）

●活動の立ち上げ

- ・現在NPO代表を務める主婦の豊田さんが、次々と空き家になり、朽ちていく尾道の建物やまちなみに危機感を抱き、坂の町に建つ一軒の空き家(通称ガウディハウス)を購入し、大工のご主人と一緒に自力で再生に取り組み始めたのがきっかけ
- ・一人の市民の「尾道のまちなみや建物を守りたいどうかしたい」という熱い思いから始まっていることはとても重要で意味のあることだと感じた。よく「空き家を活用したいが、なにかから始めていか分からない」といった「空き家活用の始めの一步」を踏み出せない話を聞くが、豊田さんの行動力とブログで毎日発信するという小さなことから始める姿勢は大変参考になる
- ・ガウディハウスの再生の様子を毎日ブログで発信し続けていた
- ・ブログが反響を呼び、少しずつ活動に賛同するメンバーや専門家が集まり始め、プロジェクトが動き出した
- ・尾道の茶園文化や歴史的背景、坂の町という特異な環境といった要素もあるが、小さなこと、今できることを継続的に積み重ねていくことが大事

●空き家の再生手法

- ・「車が入れない」坂の町尾道の逆境を活かす
バケツリレーで空き家の荷物出しや解体資材の運搬を行う、建築材料の現場搬入を行うことで、必然的にマンパワーが必要になる協働型の改修作業になる。⇒たくさんの方を空き家の再生プロセスに巻き込むことが出来る⇒巻き込まれることで、尾道に関わり続けるきっかけになる⇒作業を通じて、コミュニティの魅力など町の様々な側面に触れることで、移住定住につながっているようだ。**逆境をチャンスに変える発想力と行動力が重要！！**
- ・合宿形式で、全国から空き家の再生に取り組みたい学生社会人が集結
- ・「尾道空き家再生！夏合宿」⇒1週間の滞在で参加費48,000円、レクチャーや講師陣が手厚い！！
- ・NPOのメンバーに建築の専門家、左官屋や数寄屋大工など職人がいる。
- ・「尾道建築塾 たてもの探訪編」や空き家再生作業等、単なる空き家再生に留まらない活動の展開。

- ・空き家再生に取り組むメンバーは多種多様な人材で構成されている方が多い。
- ・空き家の流通・確保
- ・独自の定住移住相談や暮らしの相談を行ってきた実績
- ・移住までのサポートは全国各地で行われている事業だが、移住してきた方々が、その後暮らしていく際のサポートをしている事例は少ないのではと思う。移住後の改修サポート、引っ越しのサポート、荷物の片付けサポートなど移住後もずっと尾道江暮らししていけるように物理的にコミュニティ的にサポートしている
- ・尾道市の空き家バンク：尾道市とNPOが共同で空き家バンクを運営している
- ・市内の不動産屋では流通にのりにくい、山手地区の空き家を対象にしている
- ・どこの地域でも課題となる、民間の不動産会社との「折り合いのつけかた」⇒尾道では坂の上、車が入れないという逆境がプラスの作用を与えている。環境が必然的に折り合いをつけてくれるケース。民間の不動産が手を付けたがらない物件、エリア、条件をうまく読み解く必要がある。チームに不動産関係者がいるとベター。
- ・空き家を生かしてまちを面白くする仕組み
- ・ゲストハウスの運営「うなぎのねどこ」「みはらし亭」
- ・空き家を再生し、ゲストハウスとカフェを運営。普段から人が集まる仕掛けづくり。
- ・空き地公園で「空き地再生ピクニック」の実施
坂の町なので公園が少ない、また坂の町は接道条件が整っておらず、家屋が解体されてできた空き地は活用方法がない。その使い道のない空き地を公園として整備している。空き家の再生と同様、地元の子育て家族と一緒にピクニックをしながら楽しく公園を整備していく事業を行っている。空き家だけでなく空き地も含めた「空き空間」をどうするかという課題解決の好例。
- ・移住定住を検討している人向けに、1週間単位の坂の町お試し移住体験住宅の整備運営
- ・地元の大学OBと協力し、アーティスト・イン・レジデンス=AIR CAFE
- ・尾道大学で芸術関係を学ぶ学生OBたちが中心になって活動。海外からもアーティストが来て、尾道のまちを題材に製作。

事例03 門前町における空き家活用の仕組み/長野市 ヒアリング：増澤珠美（長野・門前暮らしのす すめ/ナノグラフィカ）

●活動の立ち上げ

- 1992年 信州大学を卒業後、長野市の繁華街にある「ライブアーツスペース権堂ネオンホール」の運営に参加するようになり、作品発表の場として使い始めたのがきっかけ。
- 大学を卒業したら東京へ行くが当たり前だった時代に、「長野もいいとこだよ！東京に行かなくてもいいやん」という想いで地元長野でも東京に負けないくらいの魅力ある暮らしを発信していた。
- 「自分の暮らす地域で、より豊かに楽しく暮らすために活動する」という視点が大事だと感じた。観光客や移住定住を促進することに活動や成果を求める傾向にある中で、「暮らしの豊かさ」を高めていくという方向性が重要だと確信した。
- 2003年 長野の魅力を発信するために編集室が必要だろうということで、ナノグラフィカを門前の空き家を借りて設立。
- 空き家の活用が第一目的ではなかったが、門前のまちなみ、風情が好きだったので、門前の中で事務所を探していた
- 現在、ナノグラフィカは情報収集発信の役割として喫茶スペースを運営、2階では増澤さん家族が居住。
- 2009年 長野・門前暮らしのすすめがスタート同時期に、空き工場を改修したシェアオフィス「カネマツ」設立
- 増澤さん曰く、2009年は門前のターニングポイント。同時多発的に様々な人が集まり、様々な活動が出てきた。

●空き家の再生手法

- 門前暮らし相談所+空き家見学会/2009年からスタートし2017年3月時点で66回目⇒毎月1回開催。
- 門前にある空き家を見学するためのイベント。運営側で、勝手にピックアップ(ここがミソ)した物件4, 5軒を見学して回るというイベント。門前にどのような空き家や空き部屋があり、どういった状態かを知ってもらうことが目的なため、建物の詳しい説明や大家さんの紹介はしていないとのこと。
- 民間の不動産業界との線引き、宅建法に抵触しない範囲での活動とするため
- 空き家か空き家へ移動する間に、地元の方々と立

ち話してみたり、街の雰囲気も感じてもらえることが大きなポイント。

- 「特にお金が無くても、すぐできる」のがいい。どこの地域でも真似できる手法だと感じた
- 門前暮らし相談所
 - 空き家見学会に参加して、気に入った空き家が見つかったら「門前暮らし相談所」に登録してもらい、大家や不動産屋の紹介
 - CAMP不動産として物件探しから、設計施工、運営企画まで実施しており、リノベーションの実践を担っている
 - 門前で活動しているキーマンに建築家や不動産関係が多いのが印象的だった。競合はないよう。
- 空き家の流通・確保
 - 長野・門前暮らしのすすめによる空き家見学会 長野・門前暮らしのすすめのメンバーで、空き家探しを行い、大家さんと見学会に使わせてもらう交渉を行っている。2009年から始めて、毎月1回のペースで実施しているため、かなりの数の空き家情報を持っているようだ。民間の不動産会社との事業線引きや宅建法に抵触しないように事業の実施形態、目的などを検討する必要がある。
- CAMP不動産としての空き家確保
 - 上記、長野・門前暮らしのすすめは公民館事業なため、空き家探しの際に深く踏み込めないのが実情。空き家見学会での使用することを渋る大家さんに対して、粘り強く交渉する時間と人手が足りない。それに対して、CAMP不動産は事業として空き家物件を交渉できるので、長野・門前暮らしのすすめのメンバーでは、口説けなかった空き家が流通するようになっていたとのこと。
 - 空き家活用を進めるチームに、不動産業者が入っているのは必要なこと⇒個人事業主に近い形で不動産業を営んでいる人の方が自由度がきくような気がした。
- 空き家を生かしてまちを面白くする仕組み
 - 毎週、門前のことを考える定例会議がある文化性行政やまちづくり会社、民間など多様な主体が同時多発的に活動を展開している門前において、主体間の情報共有の場があるということが重要。毎週必ず開催しているという持続力に驚く…定例会の運営の仕方が、堅苦しい会議になっていないことがポイントか。参加義務もなく、だれでも参加できる「オープンな交流の場」の設定が、継続性の鍵。
 - 門前暮らし相談所による、移住定住や空き家を使

った開業等に関する事前相談の仕組みから、アフターケアや情報共有の場、まちづくりへの参加の機会が用意されていることが、門前に人が集まり、暮らし続けている仕組みになっている。

- 尾道での事例と同様に、移住定住、開業後のアフターケア、暮らしサポート、ネットワークづくりの仕組みが必要だと感じた
- ながの門前あるき…まちの住人が門前のまちを案内する。毎月4回年間48人の住民が企画するまち歩き。巻き込み力が凄い
- 空き家だけでなく、空き地を活用したマーケットの開催など、町全体を使った取り組みが多い

事例04 空き家をシェアして活用する/塩尻市
ヒアリング：山田崇（長野県塩尻市役所）

●活動の立ち上げ

- 2011年から塩尻市の中堅若手職員の勉強会「しおラボ」が定期開催
- 2012年の「しおラボ」にて、「商店街のことを考えるなら、自分たちで住んでみないと分からない」という提案がきっかけで商店街で空き家を借りることに。
- 塩尻市の中心地に位置する大門商店街にある空き家を借りて、50名ほどの若手職員有志が月1,000円づつを出し合い、運営費を捻出するカタチで「nanoda」が設立

●空き家の再生手法

- 基本は「掃除」。大きく改修するのではなく、まずは掃除をして使い始める。
- お客さん扱いしない、活動nanodaを運営するルールは2つあって「来た時よりも美しく」「自分で率先して動く」。管理人がいなければ回らない拠点ではなく、関わるメンバー個人個人が空き家の運営に責任をもってかかわる仕組みが出来ている。
- 視察に行った我々も、とにかく掃除をした。その結果、メンバーとも仲良くなれ、nanodaという場所に愛着が生まれ、自分の「居場所」という感覚を覚えることが出来た。
- 空き家を活用する際に問題となるコーディネーター問題、維持管理問題を克服するヒントがあるように感じた

●空き家の流通・確保

- 商店街の店主たちとのネットワークを活かす

※空き家の確保する具体的な手段などはヒアリングできていない

- nanodaでの活動がきっかけとなり、商店街内で2軒ほどの空き家が活用されたようだ。そのうち1軒は設計事務所などが入るシェアオフィスとしての活用を行っている。

●空き家を生かしてまちを面白くする仕組み

- 「商店街の賑わいを創出する」をテーマに「〇〇なのだ」でイベント実施。「朝食なのだ」「ワインなのだ」などネーミングが面白い、分かりやすい。「朝食なのだ」は出社前にみんなで朝ご飯をnanodaで食べて、それぞれの仕事に行く。毎朝、nanodaを開けることが重要とうことで実施。実際に町の様子を肌で感じる事ができたようだ
- 毎日、開け続けるということはとても重要。次第にご近所さんとも信頼関係が築けてくる。
- 子供食堂など「やってみたいこと」にチャレンジできる場所
- 「空き家をお掃除なのだ」では、商店街の空き家の掃除を通じて、大家や商店街の方々と意見交換し、商店街の課題などを聞かせてもらっている。空き家の活用が「目的」ではなく、地域の課題を解決するための「手段」、地域を元気にするための「手段」であることが重要。

事例01 空き家活用サークル「佐治倶楽部」の取り組み/兵庫県丹波市青垣町



■衣川會館の外観



事例 02 尾道空き家再生プロジェクト

■空き家再生物件：ゲストハウス「みはらし亭」



■空き家再生事例：ネコノテパン工場

- 小さなスペースを上手に利用して、パン焼き工房と一人づつしか入れない店内がある。



事例 03 門前町における空き家活用/長野市

■ナノグラフィカ

- 築 100 年の町家をリノベーション。1 階に喫茶スペース、2 階に増澤さんの居住スペース。



■藤田九衛門商店

- 店主自ら、空き家リノベーションした事例。鯛焼きではなく「鯉焼き」の型を開発し、販売。



(出町研究員)

2-2 自主研究助成「新たな丹波の森構想に向けての基礎調査」

●研究の背景と目的

- 平成 30 年度に丹波の森構想 30 周年を迎えるにあたって、平成 28 年度丹波の森研究所大学では「再び丹波から発信する地域創生」をテーマとして、先進的な地域づくりに取り組む講師陣による講義が行われた。
- 本研究では、こうした状況を受けて、講義録をまとめ、その中から今後の丹波地域における新たな地域づくりの方向を見出すことを目的とした。

●講義概要

- 第 1 回：丹波からの地域創生
講師：中瀬勲（人と自然の博物館館長、丹波の森大学 学長）
- 第 2 回：ふるさとの姿を考える
講師：角野幸博（関西学院大学総合政策学部教授）
- 第 3 回：大地を見直し地域を元気づける活動：ジオパーク
講師：先山徹（兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科准教授）
- 第 4 回：地域や人材の多様性を活かした地域づくりの可能性～新潟中越地震被災地の復興から考える～
講師：澤田雅浩（長岡造形大学建築・環境デザイン学科准教授）
- 第 5 回：公開講座「地域創生フォーラム」
■コーディネーター
丹波の森大学 学長 中瀬 勲
■パネラー
関西学院大学総合政策学部教授 角野 幸博
丹波県民局県民交流室参事 西岡 正博
篠山市創造都市推進係長 小山 達明
丹波市地方創生戦略係長 福井 誠
- 第 6 回：中山間地域における集落動向と地方創生
講師：作野広和（島根大学教育学部共生社会講座教授）
- 第 7 回：獣害対策を通じて地域を創る
講師：清野未恵子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科特命助教）
- 第 8 回：新しい価値の発見“渦潮”
講師：山口平（うず潮を世界遺産の会にする淡路島島民の会事務局長）
- 第 9 回：現地学習
長浜・黒壁スクエアオ ほか 見学

- 第 10 回：新たな地域づくりの世界 CSV 地域イノベーション企業増加町
講師：金岡省吾（富山大学地域連携推進機構教授 / 副機構長 地域連携戦略室長）
- 第 11 回：人と自然の共生を考える
講師：岩槻邦男（人と自然の博物館名誉館長）

●新たな丹波の森構想に向けて

【国土のグラウンドデザイン】

- 対流促進型国土の形成
- コンパクト+ネットワーク、ダイバーシティ、コネクティビシティ、レジリエンス
- 注目は「小さな拠点」。拠点は、どのように成立するのか。それを丹波に置き換えた時に小さな拠点がたくさんあります。ただ、色々ある中で、それをどうやって支えていくか、経営していくのか。それが重要です。
- 旧集落の中心部は、閉鎖的なマーケットで、事業・顧客が一体型のムラ社会型です。ある特定のグループの中でクラブのようなものを作り、その拠点となっているような「クラブ社会型」というものもあります。NPO のようなところが運営している拠点もあります。どれが良いとか悪いとかではなく、この 4 つの拠点をどういう仕組みで支えていけばいいのか。施設を作ってから、それをどう運営するかではない。
- いろいろな経済活動を 1 か所に集めようとする集積力と、それを分散しようとする分散力という 2 つの力のせめぎ合いで自己組織化が起こり、安定的な空間構造ができる。それが不安定化すると、新しい空間構造にうつっていく。（経済学者の藤田正久先生）
- 集積力と分散力：バランスの中で、どこかで何かが集積する。そのバランスが崩れると、その集積力は別のところに動く。小さな拠点においても常に動く可能性がある。それを繋ぎとめるためのシステムを考えなければならないという事。クリエイティブクラスを支えるためにも文化の拠点というのも必要となる。
- 【地域再生に寄与する拠点とは、魅力とは】
- 丹波地域を含め、兵庫県の内陸部にどのような拠点をどういう形で作り、運営すれば、地域再生に寄与することが出来るか。
- 拠点の魅力づくりのヒントとは。
- いろいろな暮らしづくりができる、そのための器としての住まい。

- 「サードプレイス」といは。
- サードプレイスとは 3 番目の場所です。1 番目と 2 番目があります。1 番目の空間は家庭です。2 番目の空間は職場です。近代化というのは職場と家庭が離れていくプロセスでもありました。昔はお店の裏に住んでいる、住んでもものづくりをしてきました。サラリーマンというライフスタイルは、働く場所と住む場所を切り離しました。高度経済成長期になると、家庭と職場の距離がどんどん遠くなってきました。その一方で、家と職場を行き来するのが嫌になります。第 3 の場所が欲しくなる。その第 3 の場所が高度経済成長期には職場の近くに出来ました。いわゆる酒場です。
- ところが、人口が減ってくると、それだけではないよ、ということになります。遠く行った人がもう一度、都市部に戻ってくる。第 1 空間が職場の近くに動き始める。あるいは、職場の近所の第 3 の空間であった酒場が、違う場所になってくる。
- この第 3 空間というのが、ものすごく多様化していています。こういう場所を地方都市にどのように作ることが出来るのか。そこが拠点になるのではないか。
- 民族の中でハレとケという概念がある。普通の場所に、そういう場所があると暮らしの拠点になります。もちろん、人口が少ないので、常設で出来るかはわかりません。昔の農村社会ではだから祭りの日がありました。仮設の空間というのも、案外成立するかもしれません。ハピネスマーケットや若い人たちが中心となって動いている活動です。本人たちは意識していませんが、こういう流れの中にあるのだらうと思います。
- この 2 つの事だけではなく、ネットワークのあり方。色々な繋がりがあるといことが大切だということです。単なる末端かもしれませんが、それがテーマによっては全部の拠点になる事もあり得るということです。丹波の中にこういう場所がどのように作り出すことができるか。もう少し皆さん、具体的な場所を思い浮かべていただきたい。
- ネットワークの議論をしていくと、交流という言葉をよく使います。交流という言葉は 4 全総を検討している時によく使われました。90 年代の前半に交流人口論というのが盛んになりました。夜間人口や昼間人口を増やしたいが、難しいと。それだったら、一層の事、別に定住、毎日通勤してもらわなくても、そのまちに関わってくれる人を増やしたいというのが交流人口論です。その一環で、

ふるさと村民制度というのを全国のいろんな町や村が取り入れました。兵庫県にもいっぱいありました。中でも、旧西紀町は有名でした。しゃくなげ村を作りました。それが、90 年代にたくさん出来ました。ところが、あまり今は聞きませんね。なぜ廃れたのでしょうか。疲れ果てたからです。サービス、おもてなしをし過ぎました。都会から来た人をもてなして、特産品を贈るという事をやっていました。都会の人からすると、特定の町を疑似的な故郷としたいと感じる人がいますが、ふるさと村民制度では、こちらではこれを貰えるけれど、あちらはもっとたくさん貰えるという議論になってきました。というので、ちょっと忘れられていきました。

- そうこうしている時にふっと湧いたのが、ふるさと納税です。4 全総の時にもふるさと納税の考え方はありました。住民税を自分の好きなまちに納税する仕組みが出来ないだろうか。特に都会に行っている人が、自分の出身地に住民税を収めたいと、20 年前から議論がありました。その時は無理だという話でした。ところが数年前からふるさと納税が出来ました。それはそれで、また同じように同じような事が起きました。返礼品の競争が起きています。本来であれば、税金として、どこかの自治体に納まるものが、トータルで言うと納められていませんね。右下のグラフを見てください。地方税収入とふるさと納税を比較したものです。小さな町ほど、地方税収入よりふるさと納税の方が多いい町が出てきました。それは、地方によってはチャンスです。こんな動きもネットワークとか交流とかと拠点と関係してきます。

【まちづくりのプロセスの変化】

- まちづくりの潮目が変わってきている。今までは計画する人、作る人、使う人がいた時に、計画して、作って、使うという流れでした。人口が減り、まちの考え方が変わっていくと、逆転が起きます。
- 使う人が、ここで何をするのかを考え、動き始める。それを仮設とするのを常設にしてみようかと、使う人が最初に言い始めて、それで作ってみようかと。それが出来るのであれば、都市計画やまちづくりの中でそれを位置づけようと、計画する人が位置づけると。そういう逆転現象が起っています。
- 計画する人、作る人、使う人は今まで分業してきたのが、どんどん一体化していきます。まさに共

同化していく。官民の連携とか、共同だけではなく、計画する人、作る人、使う人の共同がまさに各地で起こっています。みんなが特定のまちづくりのプロジェクトの当事者になっている。

- 私もいくつかのまちの総合戦略作るのに関わっています。それを見ていると、固有性や個性を意識していますが、逆に共通の課題やテーマがよく見えてなかったりします。それから、自分の町の事しか考えていない。ネットワークをするという事に無頓着な総合戦略が多いです。
- 丹波の魅力はもともとネットワークしていた魅力だと思います。今の丹波市になる前の旧町もあります。色々なものが繋がっていた。全国から見ると丹波は、京都の丹波と兵庫の丹波と区別がついていません。そこまで繋いだネットワークの集積としての丹波があるんだという事です。氷上だけでも多紀だけでもないし、兵庫だけでも京都だけでもなく、大丹波というのがあって、バラバラに動くのではなくて、繋がればすごい情報発信力があるのになと思います。
- 計画する人、作る人、使う人という当事者が一体化していくよと申し上げましたが、たくさん小さな当事者を発掘していき、つなぎ合わせていくということ。その中で小さな渦を丹波の中に、たくさん作り出していく。これは馬場さんという全国的に面白い事をしている専門家がいます。その彼の言葉で言うと、小さな産業の渦です。渦をたくさん起こしていく。それが、いつの間に繋がっていきますよと。そこから地方創生を考えてみるという事もあるのではないのでしょうか。

【地方の地域活性化について】

- 地域で言われているのは人口が減ってきている。みなさんも感じている。子供が少なくなってくる。高齢化社会にどう対応していくのか。
- 最近地方が最先端と言いましたが高齢化の中の介護。どうやって高齢化社会を作り始めますか。地域資源を生かしてブランドを作りましょう。活性化する仕組み。今求められているのがこれです。先ほどのガルテンの人たちもソーシャルビジネス。地域ビジネス。お母さんたちが作り始めたのも地域ビジネスです。
- 人口がこれだけだと、その中で生きていく。人口減少は仕方がないその中で、この課題を考えていきましょう。
- お金を稼ぐと孫に。東京は 700 万、800 万もらえるかもしれない。富山では 300 万、400 万し

かない。農産物をもらえばいいんです。昔は地域開発。1990 年には地域開発と言っていた。戦後の焼け野原を考えてください。三陸でも津波でどっと全部なくなった。その時に考えたことは生きることです。次どうするか。住むところ。あるいは食べる場所。昔は人口を増やしていく、お金を稼いでいく、それを考えていくと産業を作るとか、港を作るとか、食べていく仕組みを作っていた。こういった世界で広がっていった。人口が伸びていく。

- 地域を再生していく活性化していく。10 年前から地域の資源を使って何かをやっていこうと。この函、長野県の下条村。道路は住民が作ります。幅の広い道路は整備してくれる。除雪すると穴悪。整備してくれない。材料代は払います。自分で道路作ってください。山の奥の方。人が少ない。民間がバス運営できなくなった。市がバス買い取ります。自分でやってください。商店街の空き地で子育て支援センター。僕が知ってる子育て支援センター。こんな価値のものを地域の人が勝手にやり始めている。
- 田舎だと旅行代理店ありません。旅行代理店、自分たちで作った世界遺産に向けて、旅行代理店を作って自分たちでお客さんと呼び始めました。今はネットでくる。小さい旅館のお兄さん、英語喋れる、ビューローの人たちと手をくんで、ビューローが金を貸す。たいして話ではないが、自分たちで作りはじめた。DMO 作ろうと。
- 農家ではお母さんが内職をしています。それを今は道の駅ビジネスが大きくなったので、売り始めました。だんだん売れ始めていって、企業の形みたくなくなる。キャッシャーがいる。だんだん企業がみたいになってくる。こういったところに高齢者が遊びに来る。デイサービス、介護に認定こういったところで夕食の配食サービスをしよう、地方なりの福祉ビジネスをやっていこうと。ゆずのジュースを作ろうか、跡地を使って何かしようかと。若い人たちがいなくなる。自分たちでやろうか。地域なりの人口がいればスーパーもガソリンスタンドも成立します。行政が計画を立てて、全てを行政がして、市議会議員も評論家でよかったと思います。今は違いますよ。議会の人たちも変わりますよね、今までの形とかわりますよと。世の中の動きが変わっていて、計画を役場が作る。新たな公。

(塩山研究員)

2-3 自主研究助成「丹波の森構想 20 周年以降の地域づくりについての調査」

●研究の背景と目的

- 丹波の森構想が策定されてからの 20 年は、丹波地域のインフラの充実、交通の利便性アップ、景観整備などと相まって「おいしい丹波」のイメージが形成されるなど、丹波地域は大きな変化の時代であった。
- 丹波の森構想の評価・検証（平成 21 年 3 月）では、構想による大きな成果を確認されたが、同時に森構想に基づく地域づくりや人づくりを推進する上で多くの課題もあげられた。
- 特に、活力ある地域づくりに欠かせない「経済的視点」や、「企業との連携」について、構想策定時には積極的な展開策が示されておらず、新たに取り組む課題となった。
- また、近年の社会情勢の変化は、経済環境の悪化、少子高齢化、限界集落問題など深刻な問題も顕在化してきている。
- 丹波の森構想の評価・検証では、これらの課題に應えるため今後の展開の基本方向として
 - ①丹波大連携の推進—グレーター丹波構想（京都丹波や但馬などともっと連携し「丹波地域」を創りあげていくという構想）
 - ②次世代の担い手育成と刺激的な学習機会の創造
 - ③地域資源の再発見と新産業への展開
 を基本的な課題としてあげ、「もりびとになってたんばらしさを楽しもう」を合い言葉に 9 つの提言を行っている。
- 本研究では、平成 30 年度に丹波の森構想 30 周年を迎えるにあたって、構想 20 周年の評価・検証委員会で提案された「丹波の森構想 9 つの新展開」について、9 つの提言内容を確認するとともに、評価・検証以降の取組現況および課題等を整理した。

提言 1：環境と経済が結びつくための仕組みづくり

- 地球環境が大きく注目される時代を迎え、環境を経済活動の中に組み入れる必要性が今後ますます高まりつつある。
- 丹波地域はその恵まれた自然と大都市圏との近接性により、環境にやさしい農業、環境にやさしい暮らしを展開するための好適地であり、経済の仕組みに環境が組み入れられることを想定し、次のような取り組みを継承すること提言している。

- 農地や里山などの田園環境の適切な管理と継承
- 低農薬、環境低負荷型の農林業の展開
- 地産地消のための仕組みづくり
- 将来の農業生産規模拡大に向けた担い手の養成や、設備などの環境整備

【現況と課題】

- むらしごと支援事業の実施（県）
- 国の「農地・水・環境保全向上対策」により、農地の適切な保全管理が進められている。
- 環境創造型農業支援事業の実施（県）
- JAにおいて、生産履歴記録制度を実施中
- 丹波ささやま特産物振興ビジョン 2010 で各種の施策を展開中
- JAの直販所、おばあちゃんの里、道の駅、日曜朝市等で各種農産物を販売中
- 学校給食への食材提供
- たんば集落営農元気アップ事業の実施（県）
- 篠山市の（有）グリーンファームささやまにおいて、農業の担い手育成を図っている
- 木質バイオマス供給施設オープン（丹波市）
- 市島ユークが有機 JAS 規格認定（丹波市）

【評価】

- 近年の環境や安全安心に対する意識の向上、また、地球温暖化防止策としての太陽光発電などの自然エネルギーの活用などが注目され、その経済的価値も高まりつつある。
- 特徴的な農産物を生産している丹波においては、そうした強みを活かしながら、環境保全や安全安心の観点から、今後さらに重要度が増すものと考えられ、積極的な取組みが必要である。

提言 2：恐竜・哺乳類化石などを活かした環境学習の拠点

- 篠山層群では、恐竜化石・最古の哺乳類化石など希少な化石が発見された。特に平成 19 年に発見された丹波市の恐竜化石については、国内はもとより、世界的にも貴重なティタノサウルス型類の全身骨格の発掘に注目が集まっている。
- これにあわせて多くのファンが現地に押し寄せ、観光資源の目玉としての価値が高まっているが、それだけでなく、里山づくりやオオムラサキなど地元の自然や環境学習に対する機運も高まり、まさに環境学習のための資源としての価値も指摘されつつある。
- 博物館などの専門機関との連携による継続的な学習プログラムの展開

●地元の自治会などと協力したまちづくり活動の継続と地元の人々の化石と周辺の自然環境に対する価値認識の向上

●化石だけでなく、植物や動物、地質、景観などに関する学習のための担い手の養成

【現況と課題】

- ・人と自然の博物館との連携（県・両市）
- ・環境学習ガイドブックの作成（県）
- ・化石発掘体験事業の実施（県・両市）
- ・丹波路魅力発見ウォーク、丹波恐竜エコツアーの実施（県）
- ・丹波の森わかもの塾～ふるさと丹波知的探求事業～の実施（県）
- ・恐竜・ほ乳類化石などを活かしたプロジェクトの推進（県）
- ・委員会を設置し、活用方策を策定（篠山市）
- ・恐竜の里づくり計画の完成（丹波市）
- ・この指とまれプロジェクトの推進（丹波市）
- ・丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム構想の策定（県）
- ・丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム構想推進事業の展開（県・両市）

【評価】

- ・この提言については、平成 26 年度に策定された「丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム構想」において、地域の貴重な資源と位置づけ、学術的な調査と共に、化石発掘体験を通して特色ある環境学習が展開されている。
- ・今後は、ツーリズムなどと結び付けた丹波の特色ある「環境学習ツーリズム」の展開が可能であり、これまで整備された多様な施設をネットワークする積極的な取組みが望まれる。

提言 3：安心・安全実現のためのコミュニティづくり

- ・丹波地域において、深刻化する少子高齢化と、地域医療を守る困難性が顕在化してきた。
- ・厳しい社会背景における丹波地域の展開を考えると、様々な取り組みについて選択と集中をはかる必要があると考えられるため、今後、特に“たんばの強み”に力を入れる工夫を行いながら、次のような事業展開が必要になる。
- コミュニティによるバックアップ
- ・濃密な地域のコミュニケーションや、祭事などのイベントの強化
- ・声掛け運動などを通じた日々の安否確認の実施

・高齢者などに地域活動に参加してもらう場面を増やすことにより、地域力の向上と参加者自身の健康づくりや生きがいの向上

・医師確保のための住民による支援運動の推進

・ふれあいバス等の運行による高齢者などの交通手段の確保

●安全・安心の基盤作り

・「都会に近い田舎」として、近隣の都市部との交流や、合併後の新しいまちづくりを支える地域間連絡道路の整備

・土石流、がけ崩れなど、土砂災害危険箇所の解消

【現況と課題】

- ・自治会による活発な地域活動の実施
- ・愛育会活動を実施（篠山市、丹波市）
- ・老人クラブ活動を実施（篠山市、丹波市）
- ・「県立柏原病院の小児科を守る会」による医療に理解のある地域づくり。
- ・鴨庄ふれあいバスの地元NPOによる運行（丹波市）
- ・コミュニティバスの運行（篠山市）
- ・ため池安全・安心の推進、維持管理防災対策の策定
- ・危険ため池、急傾斜地等のパトロール実施
- ・平成 26 年の丹波市豪雨災害からの復興（丹波市）
- ・栗柄ダム竣工（県）

【評価】

- ・平成 26 年 8 月の豪雨災害は、過去の被害を大きく上回る大きな災害であった。予測できない自然災害があるということを強く認識させられ、たものであった。
- ・今後は、土木的な災害防止と共に、山林・河川・農地などの自然環境と一体となった災害防止対策が望まれる

提言 4：丹波の森エコミュージアム群の形成

- ・丹波の自然・歴史文化・暮らしといった様々な地域資源は、1 つ 1 つが輝きを持つものであり、それらを繋げて観光や教育に活かしていくといったエコミュージアム（地域まるごと博物館）づくりが望まれます。
- 教育や観光への活用
- ・歴史地区においては、伝統的建造物群保存地区同士（例えば出石町など）が連携したテーマ型ツーリズムの推進
- ・土日などの休日には、自宅で家庭料理のお店を出すなどの「実験的取り組み」の実施

- ・地域資源を整理したガイドブックや副読本の作成
- ・家の中にある文化度の高いお宝（建築図面）や趣味の活動（竹細工、生け花）などの資源を地域の記憶としてアーカイブ化し、教育や観光への活用
- ・廃校や空き家を企業に貸し出すなど、遊休施設の積極的活用
- ・地域と学校、企業などが連携した伝統文化継承活動の推進

●担い手づくりおよび地域連携

- ・より多くの大学や研究機関と協定を結び、産学官が連携した新たな地域活性の方向性やアイデアの提案
- ・丹波地域のNPO団体等と連携し、丹波のみならず、阪神間等への積極的な事業展開
- ・篠山地区では、歴史的建築物の修復技術に優れた左官職人が多いので、職業訓練所と連携し、人材育成と景観修復をつなぐ取り組みの展開
- ・様々な学習機会を得た知識、技術、ノウハウを活かして、住民が主体となった地域活動、文化活動を促進するマッチングの仕組みの構築

【現況と課題】

- ・農村、都市コミュニティ共生モデル事業：神戸大学農学部地域連携センターと都市部のNPO法人等との連携
- ・県民交流広場事業を活用した農産物直売と農の体験。丹波地域と神戸地域との人と物の交流を図る：長田、篠山、丹波の大バザール
- ・篠山技能高等学院において、篠山市左官技術研究会による研修会を実施
- ・丹波地域人材確保協議会の開催（県）
- ・丹波の森大学、丹波OB大学受講生の活用、市民研究員制度の推進
- ・丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム構想の策定（県）
- ・丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム構想推進事業の展開（県・両市）

【評価】

- ・今後、丹波地域恐竜化石フィールドミュージアムを丹波の森エコミュージアムとして、拡大化を図り、地域の自然文化歴史資源はもとより地域の農林業や文化を体験できる「たんばのもの・こと」体験ミュージアムと発展・展開することが望まれる。
- ・こうした取り組みは、地域振興と環境（自然・文化・歴史など）を保全・活用することとなる。

提言 5：丹波地域らしい景観の継承と創造

- ・丹波地域らしい風景を継承する活動の多くは、その地で産業や農業を展開する住民によって支えられている。そういった生業のある風景を維持するため、多様な担い手づくりや、景観形成地区指定などの制度整備の検討が必要である。
- ・県の緑豊かな地域環境の形成に関する条例（緑条例）には、森林保全やミニ開発の抑制、さらには市民の主体的なまちづくり活動を誘発する効果がある。この緑条例に基づく地域づくり計画をさらに多くの地域で策定し、市民との協働のもと計画的に丹波の森を維持・継承する活動が望まれる。

●生業のある風景の継承と創造

- ・立杭地区をはじめ、より多くの「景観形成地区」の指定
- ・ブランド力のある農作物と、「地域の風物詩」や「それを用いた料理」などとの複合化による観光が展開
- ・営農組合等の各主体が農地を買い入れ、農業をやりたい人たちに貸し出す仕組みの検討
- ・農業は特に農繁期に人手不足が生ずるため、その期間だけのパートタイマーや、援農ボランティアなど、人材バンク設立
- ・農業塾の実施による農業の担い手の増加
- ・農業をしながら兼業もする、このような兼業のライフスタイル（半農半X）の実践

●市民活動による風景づくりの推進

- ・たんば風景街道戦略プランに基づき、パートナーシップ組織「たんば道えにし」を中心とした道の風景づくりの推進
- ・ひょうごアドプト制度を活用し、道路や河川等の地域住民による清掃美化活動の推進
- ・市民・企業・行政の協働による森づくりの拡大

●緑条例による地域景観の維持・継承

- ・それぞれの地域の魅力資源を再認識しながら「地区整備計画策定地区」の増加
- ・緑条例の効果について「定期的な評価・検証」の実施
- ・計画策定後の「地区間のネットワーク形成」の展開
- ・「専門家の助言を受ける仕組み」の構築

【現況と課題】

- ・農繁期など、農村で人手を必要としている時期に学生や市民が手伝いに伺い、一緒に働き、コミュニケーションを図ること、農業農村をサポート（援農）することを目的として、神戸大学農学部地域

- 連携センターが地域おこし協力隊を集落支援に活用するとともにコーディネーションを行っている。
- ・篠山市福住地区が重要伝統的建造物群保存地区に選定（篠山市）
- ・篠山城下町地区が「都市景観大賞」受賞
- ・「日本遺産」の認定（篠山市）

【評価】

- ・丹波地域らしい景観は、森林・河川などの自然、農地、伝統的なまちなみ・集落などが相まって美しい景観を形成している。従って、多面的かつ包括的な景観形成指針である緑条例による地域景観の維持・継承が強く求められるところである。しかし、縦割り行政スタイルでは難しく、市民レベルでの意識向上を図ることが重要である。
- ・丹波らしい景観に対する基本的な意識を醸成した上で、各分野での取組が効果を上げることとなる。

提言 6：空き空間の戦略的活用

- ・少子高齢化の進展、担い手の高齢化・減少、郊外型商業集積に伴う中心市街地の衰退（まちの空洞化）などに伴い、丹波地域でも「空き空間」対策が大きな課題となっている。
- ・地域（周辺地域を含む）による活用・支援はもとより、民間企業、NPOなどと連携し、休耕地と空き家をセットで売り出す仕組みの構築など空き空間を戦略的に活用していく仕組みづくりが必要である。
- 限界集落、空き家屋・空き店舗、耕作放棄地、放棄林など地域における「空き空間」の実態把握
- 企業の森づくりなど既に取り組みが始まっているが、地域住民に地域の様々な空き空間の存在を知ってもらい、地域で支援していくという意識の向上
- 地域全体で空き空間を支援していくための体制づくり、組織づくりを行うとともに、空き施設を活用した交流拠点づくりの検討
- 大学や企業が、空き空間を活動のフィールドとして利用できる仕掛けづくりを行うなど、若い人材等を外部から取り込みながら活性化していく方策の検討

【現況と課題】

- ・たんば田舎暮らしフォーラム実行委員会の支援
- ・丹波田舎暮らし交流フェアの支援
- ・田舎暮らしワンストップサービスの窓口設置（県民局）
- ・定住促進事業を本格実施（篠山市）

- ・「篠山暮らし案内所」の設置（篠山市）
- ・丹の里田舎暮らしワンストップ相談サービスの開始（丹波市）
- ・元気な地域づくり特別事業の実施（丹波市）

【評価】

- ・移住、定住に関する様々な取組みがなされており空き家や休耕地の活用が注目されるようになっている。
- ・ただ、実績効果は大木とは言えず、これまでの団塊世代が中心であった移住・定住から若者の仕事と住まいと言う観点から新たな展開が必要とされる。
- ・空き空間の活用にあたっては、それを活用し、移住・定住者の目的の分析、雇用や地域交流など、人を中心とした取組みが求められる。

提言 7：「丹波ブランド」の継承と創造

- ・「丹波」という言葉には、“ほっこりとした”、とか、“故郷を思い起こさせる”というようなイメージがある。丹波地域で生産される農産物は、このイメージに加え、安全で良質であることを追求し、「丹波ブランド」としての大きな評価を得ている。
- ・この「丹波ブランド」の評価をさらに高めるとともに、農林業を発展させ、地域活性化につなげるため、産、学、官で取り組みを進め、地域資源の新たな活用方策を検討する。
- ・丹波の農業の従事形態は、認定農業者や農業法人などの大規模化が進んでいるものの、まだまだ兼業農家が大半を占めており、高齢化の進展に伴う農家戸数の減少や、耕作放棄地の増加といった課題が顕著になっている。
- ・また、外国産材の輸入が難しくなり、国産材が見直されている状況のなか、林業の振興が課題となっている。このため、農林業の多様な担い手の育成により、適正な生産体制の構築や、特産物の品質向上が望まれている。
- 「丹波ブランド」の評価を高める
- ・農業者が「丹波ブランド」を再認識することにより、流通業者や販売業者、また消費者の生の声が届くトレーサビリティシステムの構築
- ・地産地消により、地域住民へ「丹波ブランド」の浸透
- ・地域の特産品を普及することにより、「丹波ブランド」として、食の安全安心を確保
- ・子どもたちに「丹波ブランド」の良さを伝えることにより、丹波の愛郷心の育成

●既存資源の活用

- ・田舎に伝わる技術を伝承する人材の育成（丹波木綿、炭焼き、檜皮葺きなど）
- ・藁葺き民家、せせらぎ、里山など、郷愁を誘う風景が丹波には残っており、これらを活かした田舎暮らし体験など、「丹波ブランド」としてのツーリズムの仕掛けの提案
- ・マラソン大会や、ハングライダーなど、スポーツイベントを発展させ、スポーツ・健康産業都市づくりの推進

●関連する取り組みの強化

- ・「丹波の暮らし塾」として、地域や個人の「知」と「技」を洗い出し、「丹波ブランド」としての達人のデータベース化
- ・農林業の後継者育成のため、青年層の農林業への参加促進
- ・林道整備や、林業従事者の確保による、丹波産木材の供給量増加
- ・京阪神から50km圏という丹波の立地条件を活かし、丹波地域の特産品（ブランド）を活用出来る企業の誘致

【現況と課題】

- ・「丹波ブランド認証制度」による差別化が進んでいる
- ・NPO法人「いちじま丹波太郎」では、野菜の栽培履歴情報をホームページで提供
- ・地元的生活者が地場生産物を消費することにより、生産者を支える好循環の構築を図る
- ・「地域団体商標制度」による偽物の排除による安全安心の確保
- ・食育基本法の施行による「食農教育」の推進、小学校などで「料理クラブ」の創設
- ・青垣や西紀地区で丹波木綿保存会を結成し、技術の継承に取り組んでいる
- ・「ささやまの森公園」では、冬場に炭焼きプログラムを行い、炭焼き体験が出来る
- ・山南町の村上社寺工芸社などにおいて、檜皮葺の後継者育成を進めている
- ・平成21年の春期に行われた「あいたい兵庫デスティネーションキャンペーン」により近畿圏へのPRが進んでいるため、集客イベントを支援する
- ・「丹波篠山築城400年祭」集客支援事業によるイベントの実施
- ・篠山ABCマラソン、グリーンパーク青垣でのハングライダー
- ・「丹波の森市民研究員制度」の充実

●農業インターン制度の確立

- ・新規就農者の受け皿整備
- ・(有)グリーンファームささやまの活用
- ・丹波地域森林ビジネス創出支援事業の推進
- ・市島ユークが有機JAS規格認定
- ・丹波の魅力ある農産品のPR強化「丹の里-秋の味覚フェア」開催

【評価】

- ・近年特に、地域活性化策として注目を浴び、多様な取り組みが実施され、丹波ブランドの評価は高まっている。
- ・今後は、若者世代にも共感や希望が持てるような形での取組が望まれる。

提言8：「食と農の産業クラスター」形成と、そのための「コア機能」の確立

- ・「食と農の産業クラスター」では、地域で産出される食材について、農業者、農業関連産業、食品産業、販売者などと、行政機関や研究機関が連携し、新たな製品、販路、地域ブランドなどを創出することを目的とした集団の意味として使われている。
- ・現在の農業が抱える課題として、後継者不足、遊休農地の増大、輸入農産物の増加などがあり、これらの課題を解決するための新しい枠組みとして「食と農の産業クラスター」が注目されている。
- ・これらの異業種の連携により、農畜産物や技術等の新しい価値を創造し、農業のみならず工業・商業を含む地域産業全体の発展をめざす取り組みが望まれている。
- 「産業クラスター」を推進する「コア機能」（コーディネータ機能＝産業活性化への企画、調整、推進機能）の形成
- 関連産業がスクラムを組み、地域全体で活性化をめざす取り組みの展開
- 産業グループごとの、活性化のための主体育成と確立
 - ・個人的な異業種、又は同業種中心の交流グループ
 - ・団体や組織などが連携した産業コンソーシアム（協会、組合）
 - ・協同組合など、法的裏付けのある組織
 - ・産業支援を目的とするNPO法人
 - ・企業などの営利法人
- 農作物等の地域資源や地域環境を活かした産業集積、企業立地の促進
- 【現況と課題】
 - ・商工労政課に商工振興専門員を配置している（県

民局)

- 企業紹介フェアの実施、企業誘致適地マップの作成（県民局）
- 農村地域工業導入法による工業団地への企業誘致に向け、専門員を配置してPRに努めている（篠山市）
- 新産業創造課において企業誘致を図っている

【評価】

- 様々な取組みが実施されているが、工業団地や企業誘致は重要であるが、現代の高齢化社会の中で産業のあり方を考え直すべき時に来ていると思われる。
- 丹波らしい「食と農」のあり方を考えるとともに、地域の持つ農産物資源や伝統文化を活かし、地域産業クラスターの形成やソーシャル・イノベーションの展開を検討が望まれる。

提言 9：地域連携による都市との交流と担い手の育成

- 森構想の理念の一つである「都市との交流」を通じて、丹波の良さをPRすることで、地域産業の振興や若者の定住の促進を図るため色々な事業展開が可能になる。
- また、丹波地域で生産される特産物のブランド化を推進するとともに、後継者の育成強化を行うことにより、生産能力のアップにつなげる。
- 様々な地域資源の活用
 - 夏祭りや、収穫祭など、農村交流の取り組みや、地域イベントへの参加システムの構築
 - 市民農園の拡大による丹波へのリピーターや、里山オーナー制など山と親しむ機会の提供
 - 里山ウォークディや、鉄道を利用したツーリズム企画のタイムリーな立案
 - 安心安全な特産物の生産及び認証制度で丹波をPRし、丹波との交流を希望する層の拡大
 - 県民緑税などを活用した里山林の整備促進と、「企業の森」のような事業を通じたボランティアによる保全活動の推進
- 交流ノウハウの普及
 - 田舎暮らし交流フェアなど、呼び込むための仕掛け作りとインターネットでの情報提供
 - 農業従事者の担い手育成を強化し、生産力を高めるとともに、交流の仕掛け人としても活躍出来る人材の確保
 - 森構想の域外企業への発信による企業のCSR活動の誘引

- ボランティア活動による地域づくりなど、地の利を活かした都市と農村の交流手法の普及
- 交流の最初の窓口として、都市と農村を取り持つコーディネーターの設置
- 県民交流広場を活用した交流ネットワークづくり
- 交流→半定住→定住の段階的な移住支援
- 潜在的移住希望者を定住に繋げるため、市民農園などの半定住施設へ誘導
- 半定住の顧客を多自然居住モデル住宅など定住施設に誘導する仕掛けづくり
- 丹波地域の強みを活かしたメッカの創造
- “子育てメッカ”：子育て環境としての強みは自然環境であり、それを活かした子育てのあり方を議論し、里山での保育やチルドレンズミュージアム（篠山市）の活用などの提案
- “自給自足のメッカ”：市民農園のニーズは非常に高いことから、その利用者を対象とした丹波地域での自給自足の暮らしのPR

【現況と課題】

- 美しい地域づくり推進モデル事業の実施状況をホームページで公表
- 国の構造改革特区申請により、個人が市民農園を開設出来る（篠山市）
- 丹波おおよま、福住、大洲の森で里山オーナー制を実施中（篠山市）
- 「ぶらり丹波路」においてホテル鑑賞やウォークイベントなどを紹介し、誘客を図っている（県民局）
- 地域団体商標制度による安心・安全な特産物の生産
- 里山防災林整備、針葉樹と広葉樹の混交林整備
- 企業の森づくりを油井地区、曾地中地区、宮代地区、遠阪地区、大名草地区、成松地区の6か所で行う

【評価】

- 丹波らしい景観、食と農などの様々な丹波ブランドをネットワーク化することで、新たなイノベーションやツーリズムの展開が図られる。また、それぞれの個性のブラッシュアップと新たな魅力創造が望まれるところである。
- これらを都市交流に結び付けるための情報提供（インターネットやSNSなど）を図るとともに、フィールドミュージアムと言う枠組みの中で、ネットワークを考えて行くことが望まれる。

（門上幸子 研究員）